審議会等の会議の記録

会議の名称	第3回伊勢崎地方卸売市場のあり方検討委員会
開催日時	令和4年1月25日(火) 午前9時25分～午前11時47分
開催場所	伊勢崎市役所東館3階災害対策室
出席者氏名	(委員) 齋藤委員長、重田副委員長、金井委員、三井委員、新井委員、 小林委員、塩谷委員、中田委員、桐生委員 (市場関係者) ㈱伊勢崎地方卸売市場 代表取締役 中里裕氏 ㈱伊勢崎地方卸売市場 市場長 阿久津陽信氏 (事務局) 戸田農政部長、田中農政部副部長(兼)農政課長、 久保田農政係長、竹澤係長代理
傍聴人数	5人
会議の議題	(1) 伊勢崎地方卸売市場の公益性・必要性・持続性・将来性 について
会議資料の内容	委員会次第 資料1 第2回伊勢崎地方卸売市場のあり方検討委員会議事録 資料2 伊勢崎地方卸売市場の公益性・必要性・持続性・将来 性について 参考資料1 第17期営業報告書 参考資料2 運営状況報告書 参考資料3 取引状況に関する資料(青果) 参考資料4 取引状況に関する資料(水産) 参考資料5 市場状況に関する資料(両毛市場取扱高対比表) 参考資料6 令和2年度卸売市場データ集 参考資料7 卸売市場の将来方向に関する研究会報告 参考資料8 第10次群馬県卸売市場整備計画 追加資料 足利丸足地方卸売市場建設概要

会議における
議事の経過
及び発言の要旨

1. 開 会

2. 委員長あいさつ

おはようございます。早い時間からお集りいただきまして、ありがとうございます。今回は3回目でございますけれども、前回の2回目では大変皆様からご意見またご質問を含めて、ご発言がございました。今回も前回同様、積極的なご発言を委員長の方からお願いしたいと思っております。ぜひ協力をよろしくお願いいたします。

3. 報告事項

(1)第2回伊勢崎地方卸売市場のあり方検討委員会議事録」について

【資料に基づき、事務局より説明】

意見なし

《市場関係者より追加資料「足利丸足地方卸売市場建設概要」の配布》

4. 議事

(1)伊勢崎地方卸売市場の公益性・必要性・持続性・将来性について

【資料2、参考資料1～参考資料8に基づき、事務局より説明】

●「卸売市場の位置付け」と「卸売市場の機能・役割に対する評価」について

市場：先ほどの説明にありました内容については、平成28年に農林水産省の方で第10次卸売市場整備計画方針が策定され、それに基づきまして、先ほど説明にありました問題解決に向けまして、平成30年に卸売市場法が改正され、令和2年6月21日に施行となりました。内容については、規制が緩和されて原則自由になりましたということですが、法改正に伴いまして、業務規程の改定により共通の取引規制ということで、先ほど問題提起のあった売買取引方法の公表、差別的取扱いの禁止、代金決済ルールの策定・公表、売買取引条件の公表、売買取引結果等の公表、原則禁止されていたものを位置づけ、第三者販売の原則禁止、直荷引きの原則禁止、商物一致の原則、自己買受けを、市場ごとに業務規程で定めることにより問題解決に向けて市場の業務が今年の6月より変わってきたということになっております。

委員長：事務局の説明に対する補足ということでしょうか。

市場：はい。

委員：まず、この卸売市場の機能・役割に対する評価の基礎資料としては参考資料7が基礎になっているということで、この参考資料7については、作成元が資料の後ろの方にありますが、全国規模で行われた研究の資料だと思っております。その中で、問題とされていた課題が参考資料8の計

会議における
議事の経過
及び発言の要旨

画によって改善に向かっている状況というような説明であることを理解しましたが、まだ解決できていない、例えば、施設面で言えば、ここで言うコールドチェーンの問題だとか、この部分は解決できていない、この部分は計画で改善しているという情報を教えていただけるとありがたいです。お願いします。

委員長： 市場の方にお答えいただけるということでよろしいでしょうか。今お答えできる部分と、あるいはもう少し細かい点であれば次回でも構いませんので、今お答えできる範囲で構いませんのでお願いします。

委員： 例えば、一番最初の施設面の部分で言うとコールドチェーンシステムの確立だとか、幾つか問題点があるかと思えます。先ほどの補足説明では、平成28年にこのような問題点が出て、その後、解決・改善が進んでいるものがあるとおっしゃったので、具体的にどういうものが改善していて、どういうものが残されている問題なのかということがはっきりすると、より現在の問題点がわかると思いましたので、質問させていただきました。

市場： 先ほどの質問に対しまして、①コールドチェーンシステムの確立が必要不可欠であるということをごさいますけれども、現在の卸売市場は古い建物が多くて、最新の建物になっている豊洲市場等はコールドチェーン化が進んでいるということをごさいます。あとは、私どものように卸売市場に荷受けとして入りながら、外に地続きの物流センター機能を持ってコールドチェーン化に取り組んでいる企業もある。続いて②ですが、カット野菜やフィレ加工のニーズが高まっていることに関しても、私どもは対応しているが、他市場も加工場を持ったりしながらニーズに応え始めているということをごさいます。③予約相対取引をはじめとした契約取引による安定的な取引へのニーズが高いことについては、逆に今現在はほぼ中心となった商売となっています。④商物一致規制については撤廃されましたので、ここはなくなりました。⑤他市場からの転送に依存する傾向が強まっていることについては、産地市場は自分たちの地元の野菜や魚などを消費しますけれども、我々のように海のない県については、もちろん転送するのが当たり前なので、ここは大きな問題としてはみておりません。

委員長： もし可能でしたら、青果物の転送について補足が可能であれば、後日でも構いませんので少しご教示いただきたいと思えます。

本質問は、資料としてお示しした卸売市場の指摘されていた問題点が現状どのような解決の方向に向かっているのか、あるいは解決に至っていない点はどういうところなのかというところの整理だったかと思えます。

委員： この資料の内容を聞いていると、市場の不十分の部分ばかりが強調されていて、市場の持っている役に立っている機能等がないなという感想を持ちました。確かに機能の向上が求められていることはわかるが、そうやってくると、みんなこの市場も必要ないのではないかなというように感じになってしまって、決してそうではなく

会議における
議事の経過
及び発言の要旨

て、それぞれの市場が存在して機能しているわけなので、必要性和機能が役に立っているということが現れると、また次の議論に進むのかなという気がしました。感想です。

委員長： この資料自体が、卸売市場が今後整備なりをしていかなければいけないという点で、問題点の指摘を中心としたものにどうしてもならざるを得ないのかなというところがございまして、こういう現状なので、この点を改善していきましょうという、先ほどの委員の質問にあったように、できていることとできていないことを少し明らかにしまして、ではこれを改善していかなければならないことを目的とした資料だと思いますので、言い換えると、こういう機能性があるよという点については、既に業界の皆さんはご存知なのかと思いますけれども、そういったことで、メリットの点について少しわかりにくくなっているかとは思いますが。この点は、この委員会でも、それぞれの皆さんのお立場で卸売市場の機能についてや公益性について等、まさに今回の中心的な議題になるかと思えます。その点を皆さんのそれぞれのお立場でご発言なりご意見をいただければと思います。非常に貴重なご意見をありがとうございました。

委員： 先ほどの問題点の部分で、コールドチェーンシステムが必要不可欠であるという書き方をしている。私はそのシステムについては専門家ではないので、その必要不可欠とうたっているところを、実際に内情を知っている方にお伺いしたいのですが、コールドチェーンシステムの普及割合や、全国的に見て他の卸売市場ではその整備が進んでいて、実際にコールドチェーンシステムがないと数年後や10年後、市場としての機能が果たせなくなってしまうような必要不可欠なものなのか、その辺りの位置づけとそれに対する対応策について、例えば、建替えや補強をするにはその機能を加えていかなければいけないものなのか。その辺りのお話しが聞けたらと思います。先ほどの追加の質問と言いますか、そこまでの想定ができたということでお聞かせいただきたいと思えます。

委員長： コールドチェーンについては、施設整備において非常に大きな役割を果たす機能ではないかと考えますが、具体的にもう少し市場の方からコールドチェーンについてどのようなお考えなのかということをお聞かせいただくことは可能でしょうか。委員の皆さんは実際に現地に行かれて、現場を確認されているわけですが、現状何が足りないのでしょうか。例えば、こういった整備をした市場があるという一例でも構いませんけれども。

市場： コールドチェーン化、コールドチェーン化とおっしゃいますが、現実にはそういう建物を造ったが、やっぱり使いこなしていないというのが、ざっくりばらんに言うとそれが現状です。低温の競り場を造って、冷えた中で商品の売り買いをしているのですが、結局、今はコロナ禍ということもあり、開けっ放しで外気が入る。それを運ぶトラックが冷蔵車ではない、冷凍車ではないというようになった途端に、これでもうコールドチェーンは切れる

会議における
議事の経過
及び発言の要旨

わけです。それを踏まえますと、厳密に言ってコールドチェーンという名前だけは一人歩きしますが、なかなか難しいというのが現状です。

委員長： 卸売市場でコールドチェーンがまだ十分に整備されていないがために、なかなか現場のオペレーションがまだ整っていないという形なのでしょうか。

市場： 実務に伴っていないということが一番だと思います。箱は造りますけれども、完璧にこれがコールドチェーンなのかと厳密に言った場合、ちょっと疑問はある。でも、コールドチェーンをやっていますとうたうのは、箱を造れば有りというのが今の現状だと思います。

委員： 生産者の方では農協の配送センター等で、真空要冷で急激に低温にして保冷車で送っているが、行った先で野ざらしでは商品が悪くなってしまうのですね。今の時代、夏場は40度くらいになるので、こっちで低温にしたものが途中で高温になって、またスーパーに行くときに低温にしてとなると荷が悪くなってしまう。その辺を考えて豊洲や横浜等はコールドチェーンになっていますよね。全農の戸田センターはもう完璧にパレット付きの要冷庫になっています。このようなシステムが地方市場に必要かどうかというのはあるのですが。

委員長： 生産者のお立場からすると、鮮度保持のために収穫後は速やかに温度を下げて、保冷車で出荷しているということを鑑みますと、やはりコールドチェーンが途中で途切れてしまうのでは、本来の青果物の価値が下がるようになるので、コールドチェーンは重要であるということで、大都市部の地方卸売市場ではコールドチェーンが実現しつつあったり、全農の流通センターではコールドチェーンの仕組みが整備されつつあるというふうなお話だったかと思います。貴重な生産者のお立場からのご意見をありがとうございました。

委員： 本委員会の委員の立場から言うと、生産者の大量の生産物をいかにして効率よく消費者に届けるのかという意味においては、中央・地方含めて市場の役割というのは、生産者と消費者の間に入る必要な組織・位置づけだと思っております。ただ、その中で法律が変わったりして、農協でもいろいろな対応をせざるを得ないということもあります。市場そのものを決して否定してはいけないと言いますか、必要不可欠のものというふうに思っております。

そして、先ほどのコールドチェーン関係については、委員が言ったように、特に葉物の鮮度保持により消費者へより新鮮なものを届けるという意味と、安心安全な部分も含めていると思います。常温では腐りやすい時間が大変短いということで、コールドチェーンを使えば、新鮮というか保持力が違うという面からも重要である。今だからそれをやれという締め付けは何もないけれども、これからはある程度のニーズに応じてやらなくてはならない部分も出てくると思います。

市場： 先ほどからちょっと話があれなのですがけれども、私もコールドチェーン化を、特に魚は市場としてやって

会議における
議事の経過
及び発言の要旨

いるのではなくて、荷受けとしてコールドチェーン化を100%やっている。お客様から求められていることであるので、低温の売場から温度が上がることなく、やっていることでもありますけれども、これはあくまでも市場としてやっているのではなくて、市場外でやっていることです。市場として荷受けとして仲卸とかすべてをトータルした場合のコールドチェーン化ということに関しては、今現状は出来ていないのではないかという意見です。

●「卸売市場の現状」について

市場：9ページの卸売市場数の推移に中央卸売市場、地方卸売市場ということで記載されていますが、令和2年の法改正に伴いまして、市場は県の許可から県の認定という制度に変わりました。県の認定を取らないと、地方卸売市場と地方を名乗れないということで、認定を取らないで卸売市場の営業をしている市場もあると思います。実際のところ、法改正の前には県内では14市場が県の許可を受けていたが、9市場しか認定を取らなかったということで、あとの5市場についてはそのまま営業をしています。地方の名を名乗らなくても市場をやっているということでご理解いただければと思います。

委員長：もしわかればですが、14市場から9市場に減り、5市場は認定を取られなかった。もしご存知でしたら認定を取らなかった理由は。

市場：それはわかりません。

委員：9ページの令和2年の数字が出てくるとすると、全国的にもこのような動きがあるというのであれば、地方卸売市場はガクッと下がる可能性があるというご指摘、補足という理解でよろしいでしょうか。

市場：はい。

委員長：卸売市場ではあるけれども、認定を取らなくて地方の冠が取れているところが幾つかあるという話でした。

委員：今の関連ですけれども、そうすると、令和1年以前で県の許可を受けていなくて営業をしていた地方卸売市場というものもあるということでしょうか。

市場：県の許可を受けないで営業をしている市場は私の方では把握しておりません。

委員：この令和1年の1,009については、改正前はすべてが許可を受けていたということでしょうか。たまたま改正になって認可を受けなくても出来るから、認可を受けない市場が出たということでしょうか。

市場：はい。

委員：認可を受ける、受けないことで、メリット・デメリットというのがあると思いますが、その内容は何か。

市場：地方という看板が上げられないということと、施設整備の場合に国から補助を受けられるという2点だと思います。

●「伊勢崎地方卸売市場の現状のうち、第17期営業報告書」について

委員：参考資料1の卸会社別取引状況の中で、長野県連合青果

会議における
議事の経過
及び発言の要旨

について、平成29年まで取扱量が減ってきた中で、平成30年から令和2年にかけては増加傾向になっていると記載されていますが、その辺りの理由をもしわかれば教えていただければと思います。

市場：業務内容の検討をしたということで、必要経費の見直しを行った結果、売上げが伸びたと聞いております。詳しい内容はわかりません。

委員長：卸売会社が今日ここにいるわけではないので、市場としての推測でしょうか。

市場：はい。お話を聞いた内容だけになります。

委員：一概にこの数字だけを見て言えないのですが、その年によって野菜の出来、不出来もあるし、恐らく令和3年度は大分、野菜価格が低迷したので、出荷量の単価安という状況が反映されてくると思うのですけれども。数千万円だとかそのくらいの単位は1年で変わったりするので、ほぼ微増程度であまり増えたというように捉えない方がよいかと思います。

委員長：生産者の立場からすると、市況の変化は想定される変動の内という形よろしいですか。

委員：はい。

●「伊勢崎地方卸売市場の現状のうち、運営状況報告書」について

意見なし

●「伊勢崎地方卸売市場の現状のうち、青果の取扱状況」について

委員：買参人取引高として買参人シェアが4.31%、仲卸シェアが8.43%、併せて12.7%が書かれていますが、残る金額についての流れは転送や大手スーパー等というようなものがあると思いますが、その辺の流れはどうなのでしょう。

市場：多分おっしゃられたとおりのもので、量販店や転送等であると思います。

委員：要するに伊勢崎の消費としては落ちているのでしょうか。この12.7%は正確ではないと思いますが。あるいは先ほど言ったスーパー等が一括仕入れて、また伊勢崎市内のスーパーに戻ってくるのでしょうか。

市場：はい。十分にあり得ます。

委員：先ほどの参考資料3の裏面、一番下ですが、長野県連合青果は結構フレッセイに卸していると思うのですけれども、それが算入していないということであるので、多分その辺が結構大きいのだと思います。

委員長：確かにこの資料の下の※印にありますとおり、量販店の中でも前橋市に本社があるフレッセイが入っていないということが書いてあります。かなり緻密な調査はこの手のものは難しいので、恐らく、実際にはもちろん資料にもありますとおり、これより高い比率で流通していると思うのですけれども、一応推計できる範囲としてはこのような形で出ているということでございます。

会議における
議事の経過
及び発言の要旨

- 「伊勢崎地方卸売市場の現状のうち、水産の取扱状況」について

意見なし

- 「生鮮食料品の流通をめぐる動き」から「卸売市場の適正な配置の方針」について

意見なし

- 「公益性・必要性・持続性・将来性」について

委員長：今回と次回の委員会で中心的議題になります公益性・必要性・持続性・将来性についてということですが、市場の所有者である市の意見と開設者の卸売市場側の意見が整理されたものとなっていますけれども、補足する点について市場の方から何かございますか。

市場：ないです。

委員：生産者からしてみても市場が市内にあるということは非常に貴重というか重要だと思っております。

ただ、卸売市場が言うように荷物のない荷受業ということで、自分も20年くらい前に利用していましたが、年々衰退しているなど感じていまして、自分で出荷組合を作ったりして販売したこともありました。出荷者もやはり荷物が集まらないと、段々と買い取る金額が反映されないのかなというように感じたりもしました。そういう点からも活気があれば自然と荷物も集まってくるだろうし、一般の市民も入りやすくなれば、もう少し開放的な感じができるのかなと思います。実際、今回この会議に参加するのに、うちの倅も一応農家をやっているのですけれども、話をしたら「伊勢崎の市場ってどこにあるの」と言われたくらい認知されていない部分がありますので、そういう点からも一般市民が行けるようなところにしていくというのが大事だなと思いました。当然それには、市場の現状で長野県連合青果をベースに考えておりますけれども、これから業者を選定するという事なので、その辺を充分理解して、市民に寄り添った運営をしてくれる業者をぜひしっかり選んでいただきたいなと思います。

それともう一点が、前回もお話しましたが、国の卸売市場施設整備に関する補助金を、確実に採択される方向で進めていかないと、全額自己負担というか、どういう負担になるかわかりませんが、もう少し補助金要綱を提示してもらえるとわかりやすいのかなというように思いました。

委員長：生産者の立場から、市場の出荷量が増えないことにはなかなか出荷する側からしても魅力度が上がらないということで、ご子息も就農されているということですが、市場の認知度が生産者も含めてなかなか高まっていないのではないかというお話がございました。

また、今後の整備に向けては、補助金の有効活用が必

会議における
議事の経過
及び発言の要旨

要であろうかと、仮に補助金を利用するのであれば、具体的に補助金のプロセスなどわからないとなかなか整理が難しいのかなという話であったと思います。

委員：生産者がどんどん高齢化してきております。直売所が今6店舗ある中で、補助金を使って建てたものが3店舗です。どうしても県や国の補助金等を活用すると足かせが付いていて、店舗の前には何メートル必要で、何が必要だということで、お金を貰っていいのだろうけれども、選定する場所が結構厳しく、今、農協は店舗を自己資金で建てていますよね。そうすると自由化してスムーズな形で出来ていて、からか一ぜの名乗る店舗は農協がお金を出して造っていて、その他の直売所店舗はどうしてもお金を貰って造っている関係上、維持が大変だったり、老朽化もしてきます。あと、直売所が6店舗ある中で、売り上げ的にはやや下がっているのですけれども、場所的には直売所間では伸びていたりする場合があります。市場規模は伊勢崎市民30万人ということで、買う人の分母が決まっています。伸びる店舗があれば伸びない店舗が出てきてしまうとか、あと競争により、あずま直売所では近くにフレッシュができました、やましろやができましたということで、結局来てくれるお客が来なくなってしまいます。買う人も車で来るので、こっちの店舗に行ってもよかったら、こっちの店舗に行ってしまうのですね。店舗がありすぎるというのもあるのですけれども、農協の関係で、各地区に農協があるような状況なので、これは仕方ないのですけれども。

委員長：補助金の有用性をご指摘しながらも、当然、制約も伴ってくるということで、自由度が欠けてしまうというご懸念もございました。

また、伊勢崎の周辺地域を含めて、人口というところで、さすがに消費量は青天井ではなく胃袋で決まってくるというところで、お店も量販店を含めて競争が激しい状況であるということです。消費者側の状況を踏まえてのご意見でありました。

委員：総論と言いますか、市場の必要性は私なりに大事なものだと思っている。ただ、最近になって流通が変わってきましたので、全農が市場を通すということは段々少なくなっています。イオンだとかは直接農家と契約してやるとか、先ほどの直売所等の関係もあります。その中で、私ども農協としては、生産者が作った大事な野菜を預かって、直接販売ではなくて市場を通すものについては、販売を市場の方をお願いしているというところがあります。そんな中、正直な現状を見るしかないのですが、今まで長野県連合青果がおりました、いやまだ正式にはおりますけれども、撤退するということによって、伊勢崎市の食料が危機に扮することであれば、農協としては社会的な責任感として何とかしてくれよと声を高らかに上げるべきでありましょうが、正直な話、流通の中身を見ますと、当然、伊勢崎市の中での消費されるものは数字に記載されているとおりですけれども、外からも流れてくるということで、市民とすれば、本当の伊勢崎

会議における
議事の経過
及び発言の要旨

市の地場産の物を食べるのが一番よいのでしょうかけれども、そこまでの危機感と言いましょか、それがないと、現時点では思っております。また、農協の荷を集めた物や、農家としても長野県連合青果が撤退するのは、そこに出せないではないか、それでは困るよということでもないのです。正直な話、伊勢崎市場でなくては困るということではないのです。問題は卸売業者全体の話だと、2社ほど話が来ているということではありますが、それによっても話は変わってくるのですが、生産者からの大事な荷物を預かっている以上、今、市場も本当に競争の時代で、合併、合併ということをやっていますから。信頼のおける市場を選定して、農協としては送らなくてはいけないと考えています。農協としての必要性とすれば、農家の預かった荷物が行けることと、今までのところになければ困るということではございません。それから持続性については、信頼のおける卸売業者であれば、またそれは可能性があるというように考えております。これは立場から申し上げさせていただきました。

委員長： 農協として生産者、組合員の方から委託を受けた商品を適切な形で販売していくことを鑑みますと、何か特定の流通主体に偏った取引ということではなくて多様な取引先を確保しながら、生産者の方々から預かった物を農協として販売していくという体制を構築しているというところが、ご意見、趣旨と言いますか整理されたものかと思えます。また、現在の地方卸売市場に対する厳しい見方というご意見もございました。

委員： 商工会議所の場合は、もちろん製造業も含めて2,200人くらいの会員がいるのですが、その中には市場に係る小売業者だけではなくて、外食産業や飲食店、介護施設など諸々の事業所も会員になっています。大体2,200の中で300くらいは何らかの形で食に関わっている事業を行っている方がいらっしゃいます。会員の組織率が大体30%強なので、実際に伊勢崎市内で言えば3割ですから、全体の900から1,000くらいは食に関わる仕事に携わっている方がいらっしゃるかと思えます。

生産者の方もそうだと思いますが、経営者の高齢化と後継者不足、特に小規模事業者では後継者がいないといったことで、これで先々行ったら廃業せざるを得ないといったことが危惧され、それは社会問題としても出ているところで、仮に伊勢崎市場がなくなる場合には、高齢者や後継者がいないところは廃業せざるを得ないというところも出てくると思います。関連するお店等に聞いたりしたのですが、仮に市場がなければ、商売を続けなくてはならないので、高崎や前橋など他から仕入れなくてはならないのは、それは、したいのではなくて、せざるを得ないという状況になってしまうので、市内の小売業者を含む関連業者からすると、伊勢崎市場が必要であるというのは間違いのないと思います。ただ、1回目の会議にもありましたように、建替えにしろ、耐震補強にしろ、かなりの費用がかかるということもあるので、どのようになっていくのかなというのは、これから

会議における
議事の経過
及び発言の要旨

の協議になっていくのかなと思います。事業者からすると市場は必要不可欠なものでありますし、20万の都市の中で、県の計画である程度主要な拠点の市場として位置づけられていることもありましたので、そういう点でも、伊勢崎には市場がないのかとなつてはいけないのかと個人的な感想になってしまいますが、そのように思います。

委員長： 地元の小売業等を含めて食に携わるところからすると、仕入れというところで非常に大きな役割を果たしているのが、この伊勢崎地方卸売市場であると。仮になくなったとすれば、近隣の市場には行くのだけれども、利便性が損なわれるというような位置づけでよろしいでしょうか。

委員： はい。

委員： 商工会も商工会議所と全く同じ意見です。商工会の方がどちらかというと、さらに小規模事業者が多いので、先ほどのお話のように、高齢化の問題や後継者の問題について、より深刻な部分があるかと思っています。そういった中で、市場がもしなくなるとなると、やはり深刻な影響を受ける可能性が大きいなと思います。

委員長： やはり買い手の立場からしても市場は重要な立ち位置であるということのお話があったというように思います。

委員： 私たち消費者の立場からすると、新鮮で安心安全な物を提供していただきたいと思います。流通段階等はわからないのですが、前は小さい八百屋や果物屋が結構ありましたが、今はスーパーに行かないと何にも買えない。高齢者になって、野菜等の少ない量をちょっと買えばよかったなと思うこともあります。安心安全な地場産の物を食べることを心がけています。市場がなくなるというのは悲しくなります。

委員長： 消費者側も高齢化が進んでいて、一度に買う量が減ってきているというところで、普段でも少量買えるような場や、また地場の物が安心してかつ新鮮な物が手に入るような環境づくりが必要ではないかというようなご意見であったかと思っています。

委員： 私たちは11地区の公民館で地区活動をしています。調理実習を2カ月に一度くらい行うのですが、その時のレシピに伴った食材を中里海産にいつもお世話になっています。中里海産に食材、調味料等の一切を用意していただいて、各地区の公民館に配達していただいています。ですから、今後もそれがあった方が皆さん楽なので持続して欲しいです。

委員長： 日々のご活動の中で卸売市場に入居している事業者から食材を供給してもらっていると。その立場からすると、やはり卸売市場というものは欠かせないというご意見でしょうか。

委員： はい。

委員： 今、生活環境や家族構成が昔と違って変わってきた。2世代や3世代の同居でというのは全体的に少なく、核家族になってくると、昔のようにおばあちゃんが料理して

会議における
議事の経過
及び発言の要旨

というのではなくって、帰りにお惣菜を買ってというのが増えてきている。食育の考え方がずいぶん昔と違っているの、それをどうにか市場の方で出来るのかという、それは出来ていない状態だと思います。

あと、大手スーパー等は自社で集配センターを持っていて、冷蔵庫に全部入れていて、そこから配送をかけていると思います。市場の中から転じていくという状態ではないと思います。

委員長： 今、日本全体で、この伊勢崎に限らず、家族構成が核家族化して、あるいは単身世帯も増えているところで、食の考え方といいますか、消費の形態そのものが大きく様変わりしていて、生鮮流通というよりも外食やお持ち帰りのお惣菜や弁当も含めてですが、食の外部化が進んでいるというところに、生鮮流通が主体の卸売市場の限界点みたいなものがあるのではないかというご意見だったと思います。

また、卸売市場の機能を、一部が小売業の内部に、自社の中に取り込まれているような現状もあるのではないかというご意見でした。

委員： 立場的には消費者からの見解ということになるかと思いますが。私の考えとしては、伊勢崎市場の方は地域拠点市場とされていたことから、本来市場に求められる機能の観点からすれば、公益性や必要性は当然認められる、期待されるものなんだというように考えております。特に、高齢化した事業所や高齢化した消費者が、実際利用されている中で必要性というのも現実として存在しているような状況だということもわかります。他方で、継続性の部分、運営という観点からしたときに市が支援したりだとか、あるいは業者や担い手も高齢化で失われていく可能性がある。それから流通の形式も変わってくるというお話もありました。そういった中で継続性がかなり問題となってきた状況なのかなと思っておりまして、実際に運営していて、運営ができないような状況というが、特に今回は長野県連合青果が撤退されて、2回目に配られた資料ですと、高崎市場に移転されるということですので、その卸売業者が移転することによって、利用者も移転を強いられると、結果的に強いられるとしたとしても、伊勢崎市場が縮小するような方向で影響するとすれば、そういった状況の中でも継続性がどれくらいあるのかというところを検討しなければいけないのかなというように考えました。仮に、運営が今の状況のままのスタイルでは難しいということであれば、市場のあり方の規模を変えるだとか、あるいは統廃合という観点も含めて市場利用者が困らない形で代替えていくという話を検討していかなくてはならない時期にあるのかなと、今思いました。

委員長： 今回、また次回も「公益性、必要性、持続性、将来性」の4つのキーワードを考えた時に、委員からは、公益性や必要性というものはもちろん認められるだろうと、ただ一方で、青果の荷受会社が撤退の方向で動いている点や、そこに関わる事業者、生産する側もそこを利用す

会議における
議事の経過
及び発言の要旨

る側も高齢化というところで考えると、持続性や将来性についてをより深く検討していかななくてはならないのではないかとこの点について、さらに皆さんと議論を深めていかなければならないですし、もちろん市場の方からもご意見を聞いていきたいところですが、時間が迫っているところです。議論を深めていくような点になってきましたので、次回に持ち越し、次回の検討課題という形にしまして、今回は意見集約をせずに、第4回では、今出ました4つの点について、特に将来性や持続性の部分について皆さんからご意見を頂戴したいと思っておりますので、第3回はこれにて閉めまして、第4回の検討委員会でさらなる議論と意見集約を進めていくようにしたいと思います。

●追加資料「足利丸足地方卸売市場建設概要」について
【資料に基づき、市場関係者より説明】

委員 : 解体前の建物というのは、(株)丸足の所有であり、土地も(株)丸足の所有であったということによいのですか。

市場 : 建物は足利市の所有で、土地は(株)丸足です。伊勢崎卸売市場とは逆ということになります。

委員 : 補助金の内訳を見ると、新しい建物は会社が資金を調達して建てたという理解でよいのでしょうか。

市場 : 借入れはしたようなのですが、借入額についてはお答えしていただけなかったです。

委員 : 借入れというのは金融機関でしょうか。

市場 : その辺は多分そうだと思います。

農政部 : 今の新しい建物の建設費については確認したところ、(株)丸足の方で補助金を使わずに建設をしたということです。

委員長 : 今補足がありましたとおり、建物については借入れがあるでしょうけれども、(株)丸足側が借入れをして建てたということです。

市場 : 市の方から16億円をいただいた中で、金額的に弾いたのではないかと思います。その不足分については借入れがあったのかなと考えております。

委員長 : 解体費は市が補助金を出して、その解体に伴う移転補償費等の部分を補助金の16億円で賄ったということですよね。建物はあくまでも(株)丸足がお建てになっているのですよね。

市場 : はい、そうですね。その資金としては16億円の内訳が入っているのではないかなと思うのですが、建物の総額は約12億9,800万円なんですね。足利市の方から3カ年に渡りまして16億円をいただいたということのものですから、あとは足利市場の方で借入れを行ったということも聞いているのですが、数字的には合わない部分もあるのかなと思っています。

解体につきましても、伊勢崎地方卸売市場の面積よりは若干小さい建物だったと聞いていますが、アスベスト等の関係もあるのかなと思いますが、解体費及び移転補償費等で10億円、施設整備費4億円、事業運営費2億円と

会議における
議事の経過
及び発言の要旨

いうことで賄えたのかなと考えております。

農政課： 先ほどの足利丸足地方卸売市場の補足の説明になります。丸足足利海陸物産市場は、最初は足利市の公営で行ってございました。その後、この事業を行うに当たり民営化しております。内訳として書いてあるのですが、先ほどのお話のとおり、建物自体は足利市がお持ちになっていたということですので、先ほどこちらからも説明しましたとおり、解体費におきましては所有者が行うということで、足利市が解体費を負担したということになります。ただ、足利市が解体したのではなくて、あくまで民営化した丸足足利市場に、解体費分を補助として出して、(株)丸足の方で解体してもらったというような形になっております。また、移転補償費等がありますが、元々公設であった市場でありますので、移転補償費等を含めて総額16億円というような形で足利市が(株)丸足に支払ったというようなお話を伺っております。それ以外の費用というものに関しましては、この16億円の中では出さないということなので、建物の5億7,000万円や4億8,000万円等とありますが、これは(株)丸足足利が借入れて建てたというようなお話を伺っております。

委員長： 今回は意見の集約には至っておりませんので、次回以降、第4回委員会では意見集約に持っていきたいと思います。また、今日もやや積み残しの点がございます。委員からご指摘ありました持続性、将来性の点について、また議論を深めていく必要がございますので、次回は各委員の皆様におかれましては、この点について意見をぜひ整理して、第4回を迎えていただければと思います。

では、本日の議事としては以上となります。これにて進行役を交代させていただきます。ご協力ありがとうございました。

5. その他

- ・ 次回の開催予定

6. 閉会